

閻浮提中御書

弘安元年 五七歳

「閻浮提中飢餓」又云「又示現閻浮提中刀」と。又云はく「又示現閻浮提中劫起」等云云。人王三十代 国の聖明王 国にわたす。王此を用ひずして三代仏罰にあたるべし。釈迦仏を申し隠す 念仏者等善光 寺の阿彌陀仏云云。上一人より下万 いたるまで皆人迷 。此をあらわす日蓮にあだをなす人は、総て日蓮を犯す。天は総て此の国を 二に云はく「経を読誦し書持すること有らん者を見て 輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云云。又云はく「多病瘠瘦」と。第八に云はく「諸重病」と。又第二に云はく「若し医道に従ひ、方に順じて病を治せば、更に他の疾を増し、或は復死を致さん」と。又云はく「若し自ら病有らば人の救療すること無く、設ひ良薬を服すとも而も復増劇せん」等云云。弘法大師後に望んで戲論と作す。東寺の一門上御室より下一切の東寺の門家は法華経を戲論云云。叡山の座主並びに三千の大衆 日本国山寺一同に云はく、 大日経等云云。智証大師の云はく、法華尚及ばず等云云。園城の長吏並びに一国の末流皆云はく、法華経は真言経に及ばずと云云。此の三師を用ふる国主終に皇法尽き了んぬ。明雲座主の義仲に殺され、承久に御室思ひ死にせし是なり。

願くは我が弟子等師子王の子となりて群狐 > 事なかれ。過去遠々劫より已来、日蓮がごとく身命をすて > 強敵の科を顕 師には値ひがたかるべし。国王の責めなををそろし。いわうや閻魔のせめをや。日本国のせめは水のごとし。ぬる > ををそる > 事なかれ。閻魔のせめは火のごとし。裸にして入るとをもへ。大涅槃経の文の心は、仏法を信じて今度生死をはな 人の、すこし心のゆるなるをす > めむがために、疫病を仏のあたへ給ふ。はげます心なり、す > むる心なり。

日蓮は凡夫なり。天眼なければ一紙をもみとをすことなし。宿命なければ三世を知ることなし。而れども此の経文のごとく日蓮は肉眼なれども天眼・宿命 日本国七百余歳の仏眼の流布せしやう、八宗十宗の邪正、漢土・月氏の論師・人師の勝劣、八万十二の仏経の旨趣をあらあらずいちし、我が朝の亡国となるべき事、先に此をかながへて宛も符契のごとし。此皆法華経の御力なり。而るを国主は讒臣等が凶言ををさめてあだをなせしかば、凡夫なれば道理なりとをもちて退する心なかりしかども、度々あだをなす。

美食ををさめぬ人なれば力をよばず山林にまじわり候ひぬ。されども凡夫なればかんでも忍びがたく、熱をもふせぎがたし。食ともし。麦 目が万里の一飡忍びがたく、思子孔が十旬の九飯堪ゆべきにあらず。読経の音も絶えぬべし。観心の心をろそかなり。しかるにたまたまの御とぶらいた > 事にはあらず。教主釈尊の御す > めか、将又過去宿習の御催しか、方々紙上尽し難し。恐々謹言。